書　評

ジョン・モリッシー，デヴィッド・ナリー，ウルフ・ストロメイヤー，イヴォンヌ・ウィーラン著，上杉和央　監訳　阿部美香・網島　聖・春日あゆか・島本多敬　訳『近現代の空間を読み解く』
古今書院　2017年４月　268頁　3,200円＋税

本書は、空間論的転回や文化論的転回後の英語圏の歴史地理学の動向を、テーマごとに整理したテキスト*Key Concepts in Historical Geography*の邦訳版である。本書の目的は、著者らが掲げる「批判歴史地理学」の妥当性と意義を示すこととされている。批判歴史地理学では、過去の多様性を理解することによって現在を批判的に検討すること、そして歴史地理学における知の生産を文脈化し、内省的に見つめ直すことが目指されている。冒頭の謝辞に挙げられた地理学者たちを見れば、著者らがどのような知的刺激を受けて批判歴史地理学を掲げる本書を完成させたかが想像できよう。

具体的な内容の検討に入る前に、本書の訳出を成し遂げた訳者らに敬意を表したい。訳者もあとがきで述べているように、本書で扱われている内容は日本語圏の歴史地理学とは大きく異なり、政治地理学や文化地理学等、他の下位分野と関連の深いものとなっている。このような広範なテーマを扱う学術書の訳出は多大な苦労を伴ったと思われるが、訳文はきわめてわかりやすく、原著に解説のない用語に簡単な説明も付されている。英語圏地理学と日本語圏の歴史地理学との関係については議論があるが[1)]、本書は、既刊の『モダニティの歴史地理』[2)]や歴史地理学54-1のシンポジウム「近代の歴史地理・再考」特集号とともに、日本語圏の歴史地理学に刺激を与える貴重な一冊となろう。本書の構成と各章の執筆者は以下のとおりである。

セクションⅠ　コロニアル／ポストコロニアルな地理
　第１章　帝国主義と帝国　M
　第２章　植民地主義と反植民地主義　M
　第３章　開発　N
セクションⅡ　国家／民族（ネイション）建設と地政学
　第４章　領域と場所　W
　第５章　アイデンティティとネイション　M
　第６章　心象地理と地政学　M
セクションⅢ　歴史的ヒエラルキー
　第７章　階級、ヘゲモニー、抵抗（レジスタンス）　S
　第８章　人種　N
　第９章　ジェンダー　N
セクションⅣ　建造環境
　第10章　自然と環境　S
　第11章　都市を読み取る　W
　第12章　都市形態学の地理　W
セクションⅤ　場所と意味
　第13章　景観／風景と図像学　W
　第14章　遺産（ヘリテッジ）の概念化　W
　第15章　パフォーマンス、スペクタクルそして権力　W
セクションⅥ　モダニティと近代化
　第16章　資本主義と産業化　S
　第17章　科学と技術　S
　第18章　モダニティと民主主義（デモクラシー）S
セクションⅦ　境界を越えて
　第19章　グローバリゼーション　N
　第20章　統治性（ガバメンタリティ）　N
　第21章　自然―文化　N
セクションⅧ　歴史地理的知の生産
　第22章　歴史地理学の伝統　S
　第23章　視覚化された地理　M
　第24章　証拠と表象 M

M＝J.モリッシー、N＝D.ナリー、S＝U.ストロメイヤー、W＝I.ウィーラン

以下では、各セクションと章の内容をまとめ、細かい点の批評を行った上で、本書全体の問題について指摘したい。

セクションⅠ・Ⅱは政治地理学と近い内容となっている。第１・２章はE.サイードを理論的支

柱とし、第1章では、帝国主義と植民地主義に関する概念定義と、それらへの歴史地理学のアプローチが明快に整理されており、第2章では、帝国主義を正当化する植民地言説と植民地実践の関係と、植民地主義と反植民地主義の相互作用について解説されている。モリッシーは、これらのテーマに取り組む批判歴史地理学に共通する重要な視角は、過去を認識することによって、帝国主義と植民地主義がなおも影響を与え続けている現代を文脈化することだと主張する。第3章は、開発という概念が，社会進化をもたらす営みとして歴史的にどのように構築されたのかを批判的に検討しており，A.エスコバルやJ.ファーガソンを先駆とするポスト開発論と交差する内容となっている。しかし，本章では1990年代のポスト開発論以降の開発をめぐる理論的展開や，批判歴史地理学が今もなお継続する開発の営為に対して，いかなるアプローチを取ることができるのかについては述べられていない。

第4章は，領域性概念の概要を述べ，具体的な事例として北アイルランドにおける領域紛争を取り上げている。第5章では，前半はV.アンダーソンやE.ホブズボウムの議論を，後半はE.サイードやH.バーバの議論を下敷きとして，ネイションの構築をめぐる様々な論点が提出されている。ここでは，ナショナル・アイデンティティが選択的に，かつ非対称な関係のもとに排除を包含しつつ構築されてきたこと，またそれゆえに，その歴史地理の多様性と他のスケールのアイデンティティとの関係に注意を向けることの重要性が説かれている。第6章は，その後半で言及されるように，1980年代に英語圏で隆盛した批判地政学と重なる内容となっている。批判歴史地理学は，現代の地政学の背後にあるコンテクストを説明することによって，戦争の正当化や実行における情動的な，また善対悪といった本質主義的な心象地理を指弾する。モリッシーはこのことを，第2章でも取り上げたアメリカによる対テロ戦争を事例として力強く主張している。全体として，モリッシーによる第1・2・5・6章は批判歴史地理学の視角が明確に提示されているのに対し，第3・4章はやや新鮮味に欠ける内容となっている。

セクションⅢは「歴史的ヒエラルキー」と名付けられているが，各章の議論はヒエラルキーというよりも差異化とそのプロセスを問題にしている。英語圏の歴史地理学では1960年代末頃から，「階級」，「人種」，「ジェンダー」といった概念が明示的に分析されるようになり，従来の歴史地理学がこれらの差異を自然のものとして扱ってきたことに反省が促された。第7章では，「階級」と関連し，また当概念をある程度補完する働きを持つ「抵抗」や「異議申し立て（contestation）」に焦点を当てた研究が増え，歴史地理学が権力の問題に意識的に取り組むようになったことが述べられている。第8章では，人種は単なる肌の色の違いを超え，あらゆる要素のなかで状況に応じて様々な意味や含意を持つ複雑な媒介実践（自己を他者との関係に埋め込む手段）であるとする近年の研究動向が紹介されている。地理学は道徳気候学や環境決定論において人種を認識論的に構築し，帝国主義を正当化してきた過去を持つ一方で，上述のように「移動する理論」の一形態とも言える人種差別を脱構築することができるとナリーは述べる。第9章は，第1波から第3波フェミニズムの要点を整理した上で，フェミニズム研究がジェンダー化された（歴史）地理学にせまった反省，そして逆に歴史地理学がフェミニズム研究に貢献し得ることについて論じている。ナリーは，これまでのフェミニズム研究がジェンダーや性に関する分類を歴史化できていないと批判するD.ハラウェイを引用し，歴史地理学は，歴史の中で生まれた思考パターンによって正当化されている現代の差異の枠組みに，異議を唱えることができると主張する。これは，上述の前章の主張とも重なることである。

都市地理学的な内容となっているセクションⅣの第10章では，「景観」をキーワードとして，歴史地理学が文化論的転回の影響を受けて自然に対するパースペクティブを変化させ，自然の生産や係争性（contestation）に焦点を当てるようになったことが解説されている。ただし，本章では，非表象理論やマテリアリティへの注目といった，より最近の理論的な展開に対し，自然を扱う歴史地理学がどのような動向にあるのかということは，述べられていない。これは本書を通じて言えることでもある。続く第11・12章ではそれぞれ，オーソドックスな都市化のメカニズムとシカゴ学派による古典的な都市構造モデル，そしてM.R.G.コ

ンツェンによる都市形態モデルについて解説されている。第10章でストロメイヤーが述べるように，いかに歴史的に自然が生産され，表象されてきたのかは，主に都市を対象として考察されてきた。このような近年の歴史地理学における自然に対する見方やアプローチからすれば，自然をテーマとする第10章が建造環境のセクションに含まれていても不思議ではない。むしろ，タイトルに都市を含む第11・12章の位置づけについて，本書全体の主旨からしても違和感を感じた。なぜなら，他の章は近年の歴史地理学の動向に焦点を当て，従来のオーソドックスな研究についてはごく簡潔に言及しているのみであるのに対し，この２つの章はもっぱら古典的なモデルを扱っているからである。

セクションⅤは文化地理学に共通するテーマが取り上げられているが，前セクションと同様，他のセクションに比べてやや凡庸な内容となっている。第13章は，C.サウアーらによる文化景観論とそれに対するD.コスグローブやJ.ダンカン等による批判，そして新しい文化地理学へのシフトという，日本の地理学の教科書でもよく紹介される内容となっている[3)]。第14章では，遺産（ヘリテッジ）は有形，無形に関わらず文化的に構築されるものであり，文化的資本と経済的資本の中心という二重の役割があり，葛藤が起こること，また，ある集団のアイデンティティ形成に寄与する一方で，支配的な位置にいない者たちを締め出す作用を持つことといった，遺産をめぐる論点が整理されている。第15章では，スペクタクルやパレードを通じて，公共空間が政治的に争われると同時に，視覚的に消費される空間として立ち現れることが論じられている。

モダニティ／近代化をテーマとするセクションⅥの第16章は，マルクス主義的な観点から，資本主義をいかに捉えるべきかを論じている。ストロメイヤーは資本主義と産業化のはじまりを厳密に特定することや，これらの歴史を単一の歴史として描き出すことは不可能なことから，その歴史地理の多様性を具体的に捉えることが不可欠であることを述べている。章の後半では資本主義の発達と都市，ジェンダーおよび情報化の関係についても取り上げられているが，紙幅の制限からか，各トピックに関する検討は若干物足りなく感じる。第17章では，1980年代頃までの歴史地理学では，科学や技術は普遍的なものとされ，他の章で扱われている概念と同様に独立した研究分野として見なされていなかったが，空間論的転回の影響を受け，特定の場所の訓練様式や社会化様式によって生まれることが議論されるようになったことが述べられている。第18章では，ハーバーマスの公共圏とフーコーの統治性概念をもとに，モダニティの政治的プロジェクトとそれを生み出す歴史地理が検討されている。ここでストロメイヤーは，統治行為の最適化や日常化を企図しているのは国家のみのように論じている。しかし，第20章でも解説されているように，統治性は，国家に集約されず，パノプティコンのように非明示的で「我々同士や他者との関係を媒介する」（178頁）権力によって自己を規律化していくことを概念化したものではないだろうか。このように理解した方が，個人と（国家ではなく）社会が結び付けられるポリティクスの二面性という本章の主題にスムーズに結びつくように思える。

セクションⅦの第19章は，グローバリゼーションの根源と過程の複雑な歴史地理に関する議論にはじまり，後半ではグローバリゼーションに関する規範的主張（主に，T.フリードマンの『フラット化する世界』）への批判と対抗的な動きについて述べられている。結論部分では，歴史地理学は，グローバリゼーションとその歴史地理に関する規範的主張を批判的に検討する上で有効な役割を持つとしている。しかし，後半の内容は，人文地理学に限らず人文・社会科学において広く取り組まれていることなので，そのなかで批判歴史地理学が持つ固有の役割について，より具体的に論じてほしかった。第20章では統治性を中心に，その後フーコーが発展させた理論や概念がわかりやすく解説され，それが歴史地理学的研究の理論的基盤としていかに援用されているかが述べられている。しばしば批判されるように，フーコーは植民地における権力と支配について関心を払わなかったが，本章はそれを補完する研究についても，様々な論点とともに紹介している。しかし，この章は「境界を越えて」というセクション下にあるものの，何の境界が越えられているのかは評者には理解できなかった。第17章でも統治性概念が使われているように，本章は前セクションにこ

そふさわしかったのではないだろうか。第21章のテーマは社会的自然であり，第10章と重なる内容となっている。前半はN.スミスによる不均等発展論と様々な国の事例をもとに，特に植民地の自然が資本主義の発達とともに「第二の自然」として生産され，当該地域の住民と自然の社会関係が破滅的なものになったことが述べられている。ナリーは後半で，遺伝子組み換え食物や「人間工学」といった「第三の自然」とも言える自然と人間との新たな社会関係の展開を述べ，歴史地理学がいかにこうした問題に取り組むことができるかを論じている。ただし，近年，「ヒト」というように生物種として人間を捉える視点が現れてきたことを取り上げている後半の内容を鑑みれば，「境界をこえて」という本セクション下において，本章は「自然―文化」よりも，「自然―人間」という題目の方が適していたと思われる。

セクションⅧでは，英語圏歴史地理学の学史や方法論が検討されている。第22章では，景観復元を中心的テーマとする歴史地理学の成立期から，空間論的転回や文化論的転回の影響を受け，分析枠組みやテーマが変化した近年の展開が述べられており，そのなかで時間と空間のつながりがどのように捉えられてきたのかが論じられている。第23章の前半では，批判地図学が地図化によって社会と空間を再構成し，可視化することの権力的側面を浮き彫りにし，これまでのデカルト的信条に基づく地図学に大転換をもたらしたこと，そして後半では歴史地理学における視覚資料の使用に際しては，G.ローズによる視覚資料の批判的読解を参照すべきことが述べられている。第24章では，人文・社会科学全体における知が，より内省的に文脈化された形で生産・提示されるようになったことを踏まえて，歴史地理学の研究過程をフィールド／研究分野，資料，解釈，語りの４つの側面から検討している。

以上のように，一通り各セクションと章の内容と細かい批評を述べてきたが，全体を通して本書の問題点を２つ提示したい。１つ目は，本書で取り上げられている事例のほとんどがアイルランド関連のものであり，参照されている研究も欧米の研究者によるものに偏っている点である。例を挙げると，アイリッシュ・ハンガー・メモリアルの事例は，モリッシーとウィーランがそれぞれ第５章と第14章で同じ場所の写真を使用しているほどである。著者紹介にあるように，著者全員がアイルランド研究者あるいは育ちであるため，これは仕方のないことなのかもしれない。また，モリッシーは第２章で「植民地に関する議論の多くは，反植民地主義の実行者（agency）や実践に関して十分検討してこなかった」(26頁）と述べているが，サバルタン・スタディーズ（特に初期のもの）は，まさに英領インドにおける民衆の間の反植民地主義のエージェンシーと実践に光を当てている[4]。サバルタン・スタディーズが植民地／反植民地主義の歴史に対する批判とその再構築に与えた影響の大きさを考慮すれば，モリッシーがその功績について触れていないことに対する不満は，単に評者が南アジア地域研究者であるがゆえとは言えないだろう。さらに，本書ではこのような知の偏りが見られる一方で，随所に西洋中心主義的な思考に対する批判がなされている。なかでも，第22章でストロメイヤーは「地理学史と歴史地理学史の両方で伝統的とみなされている証拠のほとんどは，とりわけ利用可能な言語の中のみ位置づけられる傾向にあり，西洋社会以外の探求が概して排除されている」ことから，このような学知の「『コンテクスト』を当たり前のものとするべきではない」(200頁）とさえ論じている。訳者もあとがきで，本書で取り上げられている概念や理論については，読者が自分にとって身近な事例に即して考える必要性があるとしているが，本書を構成する知が一部の地域のものに偏っていることは，本書全体を通じてなされている主張に関わることだけに，著者ら自身が内省的に検討してほしかった。

２つ目は，本書の構成に関することである。第１に，歴史地理学史と方法論を扱っているセクションⅧは，セクションⅠとして本書の導入的な役割をした方が，本書を通読する読者にとってはスムーズに英語圏の歴史地理学の流れを理解できたと思われる。地理学に限らず，本書のような教科書では，まず導入的に理論や方法論の大まかな流れを提示し，次に個別のテーマやトピックを取り上げるのが一般的であろう。また，第22章で詳しく述べられている1970～1980年代の歴史地理学の変化については，これより前の多くの章で断片的に言及されているし，当章では前の章まで取り

上げられてきた様々な人文地理学者たちが，必ずしも歴史地理学者と自認しているわけではないことも控えめに述べられている。こうしたことからも，セクションⅧの内容は冒頭に置いた方が妥当である。第２に，各セクションの批評でも述べたが，セクションⅣとⅦも不可解な構成になっている。特にセクションⅦは「歴史地理学全体にかかわる『見取り図』的なテーマを扱う」(10頁）とされているが，実際にはどのセクションにも入れられないけれども，本書で取り上げておくべきテーマが，「境界を越えて」という抽象的な（もっといえば，ぼんやりした）題目のもとに寄せ集められたように感じる。本書がなぜこのような構成になっているのかについては，冒頭に何らかの説明がほしかったところである。

しかしながら，これらの問題点は本書の価値を損なうものではない。著者によって温度差はあるものの（モリッシーとナリーは他の２人よりも，批判歴史地理学の視座について意識的なように感じる），本書は批判歴史地理学という視座から多岐にわたる内容を扱っている。また，最近の英語圏地理学の論文は，本書で取り上げられているような概念や議論の基礎的な知識なしには，読解するのが困難になっている。本書は重要な概念がよくまとめられていて，理解を深めるための参考文献も各章末に挙げられており，大学の地理学の教科書としてはうってつけであろう。歴史地理学だけでなく，政治地理学，社会地理学や文化地理学を学ぶ方にも一読をおすすめしたい。

（杉江あい）

〔注〕

1) Shimazu, T., Fukuda, T., and Oshiro, N. “Imported Scholarship or Indigenous Development?: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought and Social and Cultural Geography since the Late 1970s” *Japanese Journal of Human* Geography, 64-6, 2012, pp.2-24.
2) ブライアン・グレアム，キャサリン・ナッシュ著，米家泰作・山村亜希・上杉和央訳『モダニティの歴史地理 上・下巻（大学の地理学)』古今書院，2005。
3) たとえば，中俣　均編『空間の文化地理（シリーズ人文地理学７)』朝倉書店，2011。
4) 邦訳されているものを挙げると，ラナジット・グハ，ギャーネンドラ・パーンデー，パルタ・チャタジー，ガヤトリ・スピヴァック著，竹中千春訳『サバルタンの歴史―インド史の脱構築』岩波書店，1998。